

機関番号：32506

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520362

研究課題名(和文) 「距離を軸としたモダリティとポライトネスの包括的語用論」

研究課題名(英文) “Comprehensive pragmatics on modality and politeness on the basis of distance .”

研究代表者

滝浦 真人(TAKIURA MASATO)

麗澤大学・外国語学部・教授

研究者番号：90248998

研究成果の概要(和文):

ブラウン&レヴィンソンの「ポライトネス理論」は、対面コミュニケーションに関する距離の理論として読み替えることができる。距離を共通の軸として据えることによって、モダリティの機能を考える上でも大きな利点がある。第一に、敬語や呼称によって表現・伝達されるモダリティを別個に扱うのではなく、対人的距離における相対的遠近として包括的に捉えることができる。第二に、敬語や呼称等の対人的モダリティのみならず、指示詞や終助詞等による対事的モダリティをも、話し手が聞き手に対して抱く対人的距離感の反映として、相対的な遠近の相のもとに収めることができる。さらには、発話の言及内容領域における差異や言語行為の種類によって表される対事的距離も取り込むことができる。

こうしたプロセスを通じて本研究は、呼称、指示詞、終助詞等において表される対人的および対事的モダリティと言語表現における対人的距離感との関係を解明することを目的とし、それぞれにおいて表現・伝達される距離感を体系的に記述することができた。さらに、言語体系が距離を組み込んでいるさまを全体的に比較することで、日本語と韓国語、日本語と中国語とを対照しながら、対人的距離感の表現方法の異同を語用論観点から考察した。その結果、日本語における形式性と常同性への傾きと、韓国語および中国語における実質性と非定型性への傾きが、顕著な特徴として見出された。

研究成果の概要(英文):

Brown and Levinson's theory of politeness can be read as one of 'distance' in interpersonal communication. There is a great advantage to the common scale of 'distance' in considering functions of modality as well. Firstly, this makes it possible to treat modal meanings which are expressed by honorifics or address in one view. Secondly, it enables us to treat both propositional attitudes, which are communicated with indexicals or sentence-final particles, and interpersonal attitudes, which are communicated with honorifics or address, uniformly on the scale of relative 'distance' as reflex of speakers' psychological distance towards hearers. Thirdly, different senses of distance in different topics of reference and different kinds of speech acts can be treated inclusively.

This research aimed at finding out how propositional or interpersonal attitudes, which are expressed by address, indexicals, and sentence-final particles, were related to interpersonal senses of distance, and was successful in describing them systematically. Furthermore, by comparing pragmatically Japanese, Korean, and Chinese in terms of ways of organizing 'distance' into the language system, intriguing differences in ways of expressing interpersonal senses of distance were found; that is, there was a strong preference to formality and stereotype in Japanese, and in contrast, there was a pronounced tendency toward substantiality and non-formality in Korean and Chinese.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：言語学、ポライトネス、語用論、モダリティ、日韓・日中対照言語学

1. 研究開始当初の背景

对人的配慮の言語表現「ポライトネス」について、ブラウン＆レヴィンソン（以下B & L）の理論は最も広汎な影響力をもっている（B&L, 1987）。彼らの主張する「普遍」を支えるのは人類学・社会学的な“ふるまいの一般性”であり（滝浦, 2005a, 2005b）それに基づいてB & Lは、人間の对人的ふるまいを敬避的（遠隔化的）/共感的（近接化的）の二方向性において捉えた。この観点からすれば、B & Lのポライトネス理論は対人関係における距離の理論である（滝浦, 2005a）。その延長線上で、たとえば敬語について、遠隔化的な距離の表現であると定義することができる（滝浦, 2005a, 2005c, 2007a）。言語には距離とかかわりの深い形式がいくつも備わっている。たとえば呼称もまた对人的距離を表す専用の形式である。敬語においては、敬語の使用/不使用によって各々対象人物との遠/近が表され、呼称の場合は、敬避的な呼称（敬称）と共感的な呼称（親称）の対比によって对人的な距離感が表される。呼称によって表される距離は基本的に、話し手の人間関係認識を遠近のカテゴリーに分けたものである（Brown & Gilman, 1960; 滝浦, 2007d）。

しかし、言語が距離を体系に組み込んでいるさまは、さらに微細なものである。表現される事柄を話し手にとっての“いま・ここ”及びそこから隔たりにおいて捉える対事的距離の体系が、言語のうちには何重にも組み込まれている。たとえば「コソア」のような指示詞は、比喩的に拡張した多くの用法をもつ。また、日本語には終助詞の体系があり、对人的・対事的に微細な距離感を表現・伝達する。対事的距離自体は人間関係の距離ではないが、表現対象と表現形式の関係は一对一でなく、話し手が事柄に対していただく心理的距離によって遠とも近ともなる。それは話し手と聞き手の对人的距離を反映し、対人関係の表現手段として機能する。

こうした言語形式と表現内容にまたがる距離の効果とそれについての学問的知見

が、本研究の背景にある。

2. 研究の目的

研究代表者は、H.16-18年度の科研費補助金による研究の最終年度において、距離の軸が敬語以外の諸要素にも適用可能であるという着想を得て、終助詞の一部に関する試行的な考察を行ない（滝浦, 2007b）、その後も、呼称や指示詞、言及内容領域との関係等について予備的な考察を重ねた（滝浦, 2007c）。それらを通じて得られた洞察は、ポライトネスをはじめとする対人関係にかかわる発話効果は、個々の要素“固有の”語用論的機能から生じるのではなく、個々の要素の意味機能と文脈とのいわば関数的関係から生じる距離の効果だということである。

このことについて本研究は、呼称、指示詞、終助詞の各要素がもつ基本的な意味機能に明確な規定を与えた上で、諸用法の遠隔化的/近接化的な語用論的效果を、意味機能と文脈との相関関係の観点から明らかにする。言及領域に関する対事的距離については、日本語と韓国語を中国語を対照する手法によってその類型を明らかにし、言語形式との組み合わせによる総合的な“距離の語用論”の類型論を試みる。

以上を要約すれば、本研究は、呼称、指示詞、終助詞等において表される对人的および対事的モダリティと言語表現における对人的距離感との関係を明らかにすることを目標とする。

ポライトネスに関する理論として、本研究のもつ独創性は二点あると考えている。

まず第一に、本研究はポライトネスのあくまで相対的な性格を明らかにすることになる。たとえば、終助詞の「ね」には、「寒いね。 うん、寒いね。」のような情報の共有を表す用法もあれば、「これいくらですか？ 千円ですね。」のような聞き手の知らない情報に付される用法もある。本研究はこれを、「ね」固有の相異なるポライトネスとは捉えず、文脈的に見た基点からの正負の偏差によって距離感が表現・伝達されると捉えてゆく。

第二に、本研究は「ポライトネス」のみを主題とするのではなく、言語表現と文脈との関係によって「インポライトネス(無礼)」や「責任回避」といった他の発話効果が生じてくることの説明も与えようとする。こと「ほのめかし」に関しては、ポライトネスに収まらない側面が大きい(滝浦, 2006)。

関連する先行諸理論とのかかわりで本研究がもつ特色については以下のように考える。“遠近”を軸に展開した理論としては「情報のなわ張り理論」(神尾, 1990, 他)がある。本研究とも関連が深いが、最も大きな相違点は、神尾があくまで“現実の”遠近や情報の帰属に基づいた説明を追求したのに対して、本研究は、現実の遠近をベースとしながらも、話し手が敢えてそこから逸脱することで表現・伝達しようとする含みが語用論的效果であるという立場を採る。そうした語用論的效果について話し手と聞き手の知識状態に基づいた説明を与えるのが「談話管理理論」(金水・田窪, 1992, 1998, 他)であるが、本研究のスタンスは、話し手が込める含みと聞き手による推論というグライスの道筋の延長線上にある(Grice, 1989)。

管見のかぎり、モダリティーがもつコミュニケーション上の機能と、ポライトネスをはじめとする発話効果との関係づけを主たるテーマとして行われた研究はなく、その意味で本研究は、ポライトネス研究にとってもモダリティー研究にとっても意義が大きいものと考えられる。

【文献】

Brown, P. & Levinson, S. (1987) Politeness: Some Universals in Language Usage. / Brown, R. & Gilman, A. (1960) "The Pronouns of Power and Solidarity." / Grice, P. (1989) Studies in the Way of Words. / 任栄哲・井出里咲子(2004)『箸とチョッカラク』 / 神尾昭雄(1990)『情報のなわ張り理論』 / 金水敏・田窪行則(1992)『日本語指示詞研究史からへ』『指示詞』 / 金水敏・田窪行則(1998)『談話管理理論に基づく『よ』『ね』『よね』の研究』『音声による人間と機械の対話』 / 鈴木睦(1997)『日本語教育における丁寧体世界と普通体世界』『視点と言語行動』 / 滝浦真人(2005a)『日本の敬語論』 / 滝浦真人(2005b)『安心のシステムと信頼のシステム』『日本語学』24-11 / 滝浦真人(2005c)『日本社会と敬語像』『月刊言語』34-12 / 滝浦真人(2006)『単位で捉えられるもの、捉えられないもの』『月刊言語』35-10 / 滝浦真人(2007a)『会話の“場”を切り取る敬語』『月刊言語』36-2 / 滝浦真人(2007b)『敬語の語用論研究』H.16-18 科研費補助金研究成果報告書 / 滝浦真人(2007c)『呼称

のポライトネス』『月刊言語』36-12

3. 研究の方法

本研究を進める手順は、大きく5つの段階に分かれる。

(1) 距離的な発話効果をもたらす語彙要素について、先行研究における扱いと問題点を検討するとともに、収集した用例を類型化しそれぞれの基本的な意味機能を画定する。

(2) 同様に、使用文脈との相関において生じる発話効果を類型化し、それらと意味機能とを結びつける関数的な関係を記述する。

(3) 発話の言及内容領域や言語行為の種類によって表される対事的距離についても、先行諸研究を参照しつつ、言語形式の丁重度と相手の領域に踏み込む度合いの関係を類型化し、日本語と韓国語の対照を行う。文全体としての対人的距離感がどのように表現されるかについて、基本的な型を抽出し対照する。

(4) あいさつや感謝・詫びといった日常的な言語行為について、日本語と中国語(・韓国語)を対照的に比較検討し、同じように見える言語行為において遂行されている内実が異なっている可能性を探る。

(5) 以上の研究成果について、各段階において論文や学会・研究会での発表を行うとともに、ポライトネスやモダリティー、あるいは韓国語の研究者を交えて、ワークショップやシンポジウムを通じて知見を深める。

以下、上の(1)~(5)を具体的に記述する。

(1) 距離的な発話効果をもたらす語彙要素のうち、呼称、指示詞、終助詞について、まずコーパス等を利用して用例を収集し、用法の類型化を通じて個々の要素の意味機能を画定する。先行研究の多い分野だが、研究史が長い分だけ、意味機能の規定も複雑で散文的である傾向が見られる。その問題点を検討しながら、真に関与的な意味特徴を同定し、簡潔かつ形式化された形で意味機能を記述する必要がある。

(2) 収集した用例について、意味機能と発話効果の関係を探る。特に、発話効果が意味機能とは方向を異にするように見える用例について、それを導く使用文脈との関数的な関係を記述し類型化する。これは、語用論的な発話効果が語彙要素ごとに予め決まっている固有の特徴なのではなく、あくまで文脈との関係で決まる相対的な性質のものであることを示す上で、欠かすことのできない段階である。

(3) 発話における形式と内容の相互規定性について、先行諸研究を参照しつつ、日本語と韓国語の対照を行う。特に韓国語(現代ソウル方言)では、聞き手を待遇する形式が日本語よりもかなり複雑に発達しているため、

言語形式の丁重度と相手の領域に踏み込む度合いの関係も、単線的ではない様々な交差が見られる。その様相を類型化することの比重が大きくなると思われる。以上を踏まえた上で、文全体としての対人的距離感がどのように表現されるかについて、包括的な記述を目指す。

(4) 日常的な言語行為を対象とした先行研究に当たりながら、定型的な言語形式の反復使用を好む日本語と、非定型的で人間関係によって異なる言語使用を特徴とする中国語（・韓国語）という像がどの程度描けるかについて、考察を重ねる。それを通して、各言語文化において対人的距離感の表現方法がどう異なっているかを検討する。

(5) 以上の手順が順調に進まなかった場合には、最終年度において補填をする。順調に進んだ場合、最終年度は、本研究の全体像を描画するとともに、ポライトネスやモダリティー、あるいは韓国語や中国語の研究者を交えて、ワークショップやシンポジウムを通じて知見を深めてゆく。特に、ポライトネス研究としての成果にとどまることなく、発話におけるモダリティーと対人的距離感の関係を解明するという本研究の目標に向けて、積極的な発信と交流を行なってゆく。

4. 研究成果

本研究はモダリティーとポライトネスを、対人的・対事的な距離、すなわち話し手が聞き手と事柄に対してとる構えという観点から捉えようとした。それによって、敬語や呼称が表す対人的モダリティーも、指示詞や終助詞等が表す対事的モダリティーも、ともに相対的な遠近の相の下に収めることができ、異文化対照研究にも資するところが大きいと期待された。

H.20年度は、距離的な発話効果をもたらす語彙要素について、先行研究における扱いと問題点を検討するとともに、基本的な意味機能を画定し、意味機能と文脈との関係で決まる相対的な発話効果の関係を探る計画だった。幸い、予定を上回る成果を得ることができ、研究代表者は、敬語とポライトネスに関する論考や、距離を軸とした日韓対照ポライトネス研究の一端を公刊することができた。

さらには、モダリティー研究とポライトネス研究の接点から広がる可能性を探るべく、滝浦の他、宮地朝子・北村雅則・加藤淳・深津周太・申 媛善・張 群・木山幸子らによるレクチャーと討論で構成された「科研費補助金によるワークショップ：モダリティーとポライトネスの語用論」を開催することができた（於・麗澤大学東京研究センター、2009.2.28）。高度な専門家を多く含む約 80名の参加者を得て、活発かつ非常に有意義な

討論の結果、モダリティー形式の変遷や発達
の動機づけとしてポライトネスが一定の要因
になっていること、また、ポライトネスを
決定づける要因の多様性についての探求が
必要であること、が明らかとなった。

異文化間対照に関しても、特に中国語との
対照について一定の成果を得た。中国語の
コミュニケーションにおいて、人間関係の親疎
（上下）によって大きく異なるコミュニケー
ションのモードが存在するとの洞察を得て、
その一端を、「2009 年国際シンポジウム：東
アジアの言語・文化の比較」（於・北海道大
学大学院文学研究科言語情報学講座、
2009.2.15）における招請講演「文化比較に
おけるポライトネスの観点 日中対照を例
に」で発表した。

研究テーマの全体から見たとき、初年度の
研究成果がポライトネスへの傾きが強かつ
たことに鑑み、H.21年度はモダリティー研究
との接点と展開を探ることに力点を置いた。
その結果、ポライトネスの文法論的位置づけ
は、従来の命題/モダリティーという二分法
ではなく、それとは別次元の客観性/主観性
という二分法が要請されるとの見解に達した。
また、その過程で、日本の文法研究史にお
ける敬語とモダリティーの扱い方について
新たな知見を得ることができた。

本年度の研究活動においては、他の研究者
との意見交換に力を入れ、研究成果の口頭で
の発表も積極的に進んだ。なかでも、科研
費補助金による金水敏・井上優氏との共同シ
ンポジウム「敬語における視点とモダリテ
ー：歴史語用論とポライトネスの観点から」
（於・麗澤大学東京研究センター、
2010/02/26）は、100名を超える聴衆を得、
日本語敬語の歴史的展開も踏まえて、過去と
現在をともに視野に入れることのできる枠
組みを探る非常に有意義な会となった。その
成果はまた、金水敏氏との対談「日本語の
「今」を捉え損ねないために ポライトネ
ス研究と歴史語用論から見えてくるもの」
（『月刊 言語』38-12, 特集・言語学的探求の
行方, 大修館書店, pp.8-18, 2009/11）にも活
かされた。

研究期間の最終年度に当たる H.22 年度は、
これまで 2 年に渡る研究活動を通じて得
られたいくつかの論点について、集中的に研
究を行なった。

まず第一に、言語による表現とは命題とモ
ダリティーの合一にあるとの観点から、日本
語においてポライトネスの代表的表現手段
である敬語のモダリティー性について、理論
的な側面からの考察を行なった。この問題は、
言語における主観性の表現という一般的な
問題と連続しており、ひいては、主観性の表
現が相対的に大きな比重を占める日本語文
法のあり方を考えることにもつながってい

た。

第二に、ポライトネスのコミュニケーションという機能的側面を、表現の媒体となる言語形式の側から改めて検討した。「走れ」「しろ」のような“はだかの命令形”に着目し、その多様な意味機能と核にある基本義との関係を検討した結果、ポライトネスが、同一の言語形式によって表現しうる話し手にとっての表現意図の1つであることが再確認できた。

第三に、近代から現代にかけての日本社会の変容との関わりで、日本語におけるポライトネスの変遷を跡付ける作業に着手した。また、外国語との対照も合わせて考察することで、ポライトネスの観点から日本語コミュニケーションの来し方と行く末を描くことができると考えている。

以上の研究成果を、公刊された研究業績の点から見直してみると、まず、著書『ポライトネス入門』(2008)における総論と概略的な各論を提示した後、敬語をはじめとする狭義の待遇表現を「距離」の観点から整理したのが論文「敬語から見たポライトネス、ポライトネスから見た敬語」(2008)であり、言語形式と言及内容に関して同様の観点から対照言語学的考察を行なったのが論文「距離と領域の語用論」(2008)である。対人的・対事的モダリティと文法との関係については、論文「文法という思想」(2008)での素描をもとに、一文法家についてのモノグラフの一部として著書『山田孝雄』において展開することができた。社会的コミュニケーションにおける言語行為の対照語用論的研究は現在も途上にあって継続中だが、日中対照と日韓対照に関する講演をそれぞれ行なった(2009, 2010)ほか、その過程で浮かび上がってきた日本語における形式性・常同性への傾きをめぐって、ポーランドでの講演「新しい葡萄酒と新しい革袋を：人間関係の変容と日本語の新しいポライトネスの形」において今後の研究の方向性を述べた。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

滝浦真人「文法という思想 山田孝雄の喚体と述体をめぐって」『日本語の哲学』(哲学雑誌) vol.123, n.795, 2008.9, 哲学会, pp.89-107. [査読付学会誌]

滝浦真人「敬語から見たポライトネス、ポライトネスから見た敬語 その語用論的相対性をめぐって」『社会言語科学』11-1 (特集:敬語研究のフロンティア)2008.9, 社会言語科学会, pp.23-38. [査読付学会誌]

滝浦真人「距離と領域の語用論 日韓対照ポライトネス論のために」, 森雄一・西村義樹・山田進・米山三明 編『ことばのダイナミズム』2008.9, くるしお出版,

pp.31-49. [編者による査読有]

滝浦真人「『敬語』の語り方 山田孝雄が遺したもの」『文学』9-6 (特集:敬語とコミュニケーションの現在)2008.11, 岩波書店, pp.43-50. [専門的商業誌の依頼論文]

滝浦真人「ポライトネスと語用論 “はだかの命令形”の考察から」, 上野善道 編『日本語研究の12章』2010.6, 明治書院, pp.181-195. [編者による査読有]

[学会発表](計5件)

KIYAMA Sachiko, TAMAOKA Katsuo, TAKIURA Masato, Motivations behind face-work by native Japanese speakers in conflict situations between self and other. Oral presentation at the 137 meeting of the Linguistic Society of Japan, 2008.11.29, Kanazawa University.

滝浦真人「文化比較におけるポライトネスの観点 日中対照を例に」北海道大学大学院文学研究科言語情報学講座 2009 年国際シンポジウム「東アジアの言語・文化の比較」2009.2.15, 北海道大学 [招請講演]

滝浦真人「対人コミュニケーションから見る日本語の将来? “敬”か“親”か?」, 金水敏・滝浦真人・荻野綱男・木部暢子・鳥飼玖美子「日本語の将来」(日本学会議主催公開講演会)2010.9.19, 日本学会議講堂 [招請講演]

滝浦真人「ポライトネスから見た敬語、敬語から見たポライトネス」待遇コミュニケーション学会 2010 年秋季大会 (第13回), 2010.10.30, 早稲田大学 [招請講演]

滝浦真人「新しい葡萄酒と新しい革袋を：人間関係の変容と日本語の新しいポライトネスの形」, 国際学会「日本 21世紀の新挑戦」基調講演, 2010.11.25, アダム・ミツケヴィッチ大学 (ポーランド・ポズナニ市) [招請講演]

[図書](計2件)

滝浦真人『ポライトネス入門』2008.9, 研究社, 176p.

滝浦真人『山田孝雄 共同体の国学の夢』(菅野覚明・熊野純彦責任編集「再発見日本の哲学」)2009.9, 講談社, 217p.

[その他]

・上記以外の招請講演 (計3件)

滝浦真人「対人関係の距離感を表現する 日韓対照語用論のために」韓国外国語大学大学院日語日文学科, 2010.6.4, 韓国外国語大学 (韓国・ソウル市)

滝浦真人「文法をつくるという営み 山田文法とは何だったか?」東北大学文学部・文学研究科国語学研究室特別講演, 2010.5.22, 東北大学

滝浦真人「対話におけるポライトネス文化研究の方法」名古屋大学大学院国際言語文化研究科・対話セミナー,2009.11.7,名古屋大学

- ・ 科研費補助金によるシンポジウム, ワークショップ(計3件)
滝浦真人・宮地朝子・北村雅則・加藤淳・深津周太・申 媛善・張 群・木山幸子他「モダリティーとポライトネスの語用論」(科研費補助金によるワークショップ)2009.2.28,麗澤大学東京研究センター
滝浦真人・金水敏・井上優「敬語における視点とモダリティー: 歴史語用論とポライトネスの観点から」(科研費補助金によるシンポジウム)2010.2.26,麗澤大学東京研究センター
井上優・滝浦真人・定延利之・千葉庄寿「終助詞シンポジウム」(科研費補助金によるシンポジウム、麗澤大学言語研究センター共催)2010.9.11,国立国語研究所

6. 研究組織

(1) 研究代表者

滝浦 真人 (TAKIURA MASATO)
麗澤大学・外国語学部・教授
研究者番号: 90248998